

青年期・成人前期の女性が抱く女性観が一般性自己効力感、本来感、ハーディネスおよび人生への向き合い方に及ぼす影響^{1) 2)}

三浦正江^{†1} 平野真理^{†1†2} 近藤有美香^{†1}
(令和4年12月3日査読受理日, 研究論文)

Effects of perspectives on women in female adolescence and early adulthood on general self-efficacy, sense of authenticity, hardiness, and attitude toward life

MIURA, Masae^{†1} HIRANO, Mari^{†1†2} KONDO, Yumika^{†1}
(Accepted for publication 3rd December, 2022, Research Article)

要約

本研究の目的は、青年期および成人前期の女性が抱く女性観が一般性自己効力感、本来感、ハーディネス、人生キャリア成熟度に及ぼす影響を明らかにすることであった。大学生および社会人(20—40歳代)の女性1,000名を対象としたWeb調査を行った。分析の結果、①社会の中でチャレンジできるという女性観やハーディネスは社会人になると低下傾向にあること、②社会の中でチャレンジできるという女性観を持つことがハーディネス、本来感、人生キャリア成熟度を高めることが示唆された。今後は、雇用形態や家庭状況を含めた詳細な検討やネガティブな女性観の変容を目指した心理教育的プログラムの開発が期待される。

Abstract

This study was designed to identify the effects of adolescent and young adult women's images of women on their general self-efficacy, sense of authenticity, hardiness, and life career maturity. Female college students and working women (N = 1000, age range 20-40 years) completed a questionnaire. The results suggested that images of women as persevering in society and being hardy increased female college students and working women's hardiness, sense of authenticity, and life career maturity. However, these positive images tended to decline as women entered the workforce. It is suggested that further studies that include women's employment status and family situations should be conducted in the future. Moreover, psychoeducational programs should be developed to change negative images of women.

キーワード：女性観、自己効力感、本来感、ハーディネス、人生キャリア成熟度

Key words: perspectives on woman, general self-efficacy, sense of authenticity, hardiness, life career maturity

1. 問題と目的

我が国では、1986年の男女雇用機会均等法、1999年の男女共同参画社会基本法の制定などにより、男女が対等な存在としてあらゆる社会活動に参画するための制度が整備されてきた。また、育児・介護休業法、次世代育成支援対策推進法、女性活躍推進法、政治分野における男女共同参画の推進に関する法律など、複数の法が女性の社会参画を後押しするために制定・改正されている。これに伴い女性の就業率は上昇し、2021年の共働き世帯は1,247万世帯と1980年の614万世帯の倍になっている。また、男女共同参画社会に関する世論調査によれば、性別役割分業に反対する人の割合が1997年(37.8%)から2002年(47%)にかけて増加している。

しかし、年齢階級別の就業形態をみると、女性の正規雇用のピークは25—29歳であり、その後35—39歳を底に再度上昇するが、この際にパート・アルバイトといった非正規雇用の割合が多くなっている¹⁾。また、三菱UFJリ

サーチ&コンサルティングの調査²⁾では、女性が妊娠・出産前後に退職した理由として、「家事・育児に専念するために自発的にやめた(39.0%)」が最も多く、次に「仕事を続けたかったが、仕事と育児の両立の難しさでやめた(26.1%)」であった。すなわち、結婚・出産を機に正規雇用の職を退職し、育児が落ち着いたタイミングで家事・育児と両立しやすいパート・アルバイト等の非正規雇用で再就職する女性の状況がみとれる。

また、令和元年度内閣府委託調査「令和元年度家事等と仕事のバランスに関する調査報告書」³⁾によれば、夫婦のみ世帯における女性の家事時間(週全体平均)は男性の2.6倍、夫婦+子ども世帯では2.8—3.3倍となっている。同様に女性の育児時間は男性の2.1—2.7倍であり、女性の社会進出に伴い共働き世帯が増加しているにもかかわらず、依然として女性の家事・育児の負担は男性に比べて顕著に大きいことが伺える。国際的にみても日本の男女平等の実現は遅れており、世界経済フォーラムが公表した「ジェンダー・ギャップ指数2022」によれば、日本は世界146ヶ国中116位であり、先進国の中では依然最低レベルの順位であ

†1 東京家政大学人文学部心理カウンセリング学科

†2 お茶の水女子大学生活科学部心理学科

1) 本研究は東京家政大学総合研究プロジェクトの成果の一部である。

2) 本研究の一部は日本心理学会第85回大会で発表された。

った。

このように、男性と対等な女性の社会参画がなかなか進まない背景には、日本社会の中に、「男は外で働き、女は家庭を守るもの」や「男性らしさ／女性らしさ」といったジェンダーにおけるステレオタイプや役割分業意識が根強く存在していることがあげられる。たとえば、高井・岡野⁴⁾は男らしさ／女らしさに関する自由記述調査を行っている。その結果、男らしさとして「頼りがい」、「たくましさ・強さ」、「決断力・判断力」、女らしさとして「上品」、「気遣い・繊細さ」、「家庭的」などが得られているが、これらは約30年前の先行研究⁵⁾とほぼ共通した内容であり、大きな変化は見られないと報告している。また、先行研究^{6,7)}を概観すると、一般論としての性差観は弱くなりつつあるものの、具体的な家庭生活や行動レベルになると性差観が強い可能性、特に母性意識へのジェンダーステレオタイプは強く、伝統的意識が変化しにくいことが示唆される。

さらに、「女性は論理的思考ができない」、「女性は数学が苦手である」といった能力的なジェンダーバイアスも存在する。行動遺伝学の領域において、知能や学業成績の違いは性差ではなく個人差によるという複数の研究報告^{8,9)}があるにもかかわらず、このような偏見は少なくない。伊藤¹⁰⁾は、性差観が強い者は、男女で職業や社会的地位に違いがある理由を女性の能力不足のためと考える傾向にあると指摘している。そして、森永・坂田・古川・福留¹¹⁾が女子中高生を対象に行った実験では、「女の子なのに数学ができてすごいね」という好意的ではあるものの性差別的な発言を受けることで、数学の成績が良い女子生徒の学習意欲が低下することが報告されている。

このようなジェンダーステレオタイプやジェンダーバイアスは、女性のメンタルヘルスやキャリア選択にネガティブな影響を及ぼすことが指摘されている。伊藤・秋津¹²⁾は、女性は男性に比べて、自分が望む性役割と社会から女性に期待される性役割の不一致を感じ、性役割葛藤が生じていると示唆している。一方、松本¹³⁾や吉岡¹⁴⁾の実験では、自己がもつ性役割意識にかかわらず、女性は他者から向けられた性役割期待に沿った振る舞いをする傾向が示されている。すなわち、女性は内面に葛藤を抱えながらも、社会から期待される「女性らしい」行動をとることで適応しようとしていることが推察される。就学前の子どもをもつ母親を対象とした調査では、性別役割分業意識が高い母親ほど、家事・育児と仕事の両立によって、日常生活ストレスが高まっている可能性が報告されている¹⁵⁾。仕事をしても、女性としてしっかり家事・育児を行わなければならないと考え、ストレスを抱えてしまうことが示唆される。

また、女性の性役割のみを強くもつことは、メンタルヘルスに負の影響を与える可能性がある。芳田¹⁶⁾は、大学生を対象とした調査を行い、女性性役割タイプ(Feminine)の女性は、女性性と男性性を備えた性役割タイプ(両性具有性:androgyny)の女性に比べて自尊感情や充実感が低いことを報告している。すなわち、社会の期待に応じて女性らしく行動する側面が強くなると、自尊感情や充実感の低下に結びつく可能性が考えられる。

このようなメンタルヘルスの問題に加え、キャリアに関するネガティブな影響も報告されている。たとえば、Betz & Hackeet¹⁷⁾は、女性は男性に比べてキャリアに関する自己効力感を持ちにくいと述べている。同様に、Matsui, Ikeda, & Okunishi¹⁸⁾は、男子学生は男性的職業と女性的職業のいずれにも同程度の自己効力感を示す一方で、女子学生は男性的職業への自己効力感が女性的職業よりも低い傾向に

あることを示している。また、正規雇用で働く若年女性を対象とした研究においても、出産後の就業継続や昇進等のキャリアに対する自己効力感が低いことが報告されている¹⁹⁾。自己効力感の高さは行動の遂行に影響するため、キャリアに対する自己効力感が低いことによって、女性は自己の可能性を過小評価し、キャリア選択の幅を狭めてしまうことが推察されよう。

以上から、社会および女性自身の中にあるジェンダーステレオタイプや性役割意識によって、女性は葛藤やストレスを経験しやすく、自らを過小評価し、社会の中で自分らしく自信をもって働くことができていないと推察される。しかし、価値観の多様化に伴い、近年では人生・生き方の選択肢は多彩なものとなっている。したがって、仕事に限定せず、広く仕事を含めた人生・生き方のとらえ方や全般的な自己効力感に着目する必要がある。そこで本研究では、女性が抱いている「女性とはこういうものだ」という認知、すなわち女性観と人生・生き方のとらえ方および一般性自己効力感との関係を検討することを目的とする。同時に、ストレスに強い性格特性とされるハーディネス、自分らしく振舞っている感覚である本来感についても取り上げる。これらの要因について検討することで、女性が抱く女性観がメンタルヘルスに及ぼす影響について、幅広い知見を提供することが期待される。

ところで、平野・三浦・近藤²⁰⁾は、社会から求められる女性像は時代を反映して変化し続け、現代を生きる若者はそうした女性観を内在していることが想定されると述べている。これを踏まえ、近藤・平野・三浦・岡島²¹⁾は、文章完成法の手法を用いて、現代の男女が無意識に抱えている女性観を測定する女性観尺度短縮版を作成した。そこで本研究では、この新しい女性観尺度短縮版を用いて検討を行う。

2. 方法

2.1 対象者

2020年12月に、インターネット調査会社にモニター登録している女性1,000名を対象にWeb調査を実施した。対象者の内訳は、大学生300名(20—22歳)、社会人700名(20—29歳300名、30—39歳200名、40—49歳200名)であった。

2.2 調査内容

(1) 女性観尺度短縮版

近藤他²¹⁾が作成した尺度を用いた(Table 1)。大学生・社会人男女合計1,000名を対象としたWeb調査によって得られた自由記述をもとに調査項目を準備し、探索的因子分析及び確認的因子分析によって作成された。「細やかな思考力・判断力」、「社会の中のチャレンジと成長」、「献身的で愛情深い」、「自立しておらず補佐的」、「感動的でしたか」、「見た目がよく清楚」の6下位尺度24項目から構成されており、信頼性と妥当性が確認されている。各項目に対して「そう思わない=1」から「そう思う=4」の4件法で回答を求めた。

(2) 一般性セルフ・エフィカシー尺度

坂野・東條²²⁾が大学生を対象に作成した一般性セルフ・エフィカシー尺度(GSES)を用いた。「行動の積極性(例:どんなことでも積極的にこなすほうである/何かを決めるとき、迷わずに決定するほうである)」、「失敗に対する不安(例:仕事を終えた後、失敗したと感じることのほう

Table 1 女性観尺度短縮版の下位尺度と項目例

下位尺度	項目例
細やかな思考力・判断力	女性には、物事を見極めて判断する力がある 女性には、きめ細やかに考えることができる
社会の中でのチャレンジと成長	女性には、社会の中で成長できる 女性には、社会の中で積極的に活動・チャレンジしている
献身的で愛情深い	女性には、他者に尽くす 女性には、周囲をサポートし、支える
自立しておらず補佐的	女性には、他者を頼って助けてもらう 女性には、裏方作業に適している
感情的でしたたか	女性には、相手によって態度をかえる 女性には、感情的だ
見た目がよく清楚	女性には、おしゃれだ 女性には、清楚だ

が多い／何かをするとき、うまくゆかないのではないかと不安になることが多い)、「能力の社会的位置づけ(例:友人より優れた能力がある／世の中に貢献できる力があると思う)」の3下位尺度16項目に対して、「あてはまらない=0」か「あてはまる=1」の2件法で回答を求めた。

(3) 本来感尺度

伊藤・小玉²³⁾が大学生を対象に作成した1因子7項目(例:いつも自分らしくいられる／いつでも揺るがない“自分”をもっている)の尺度を用いた。各項目に対して「あてはまらない=1」から「あてはまる=5」の5件法で回答を求めた。

(4) ハーディネス尺度

多田・濱野²⁴⁾が大学生及び中高年の対象者を用いて作成した尺度を用いた。「チャレンジ(例:できればさまざまな経験をしてみたい／目新しく変化に富んだいろいろなことをしてみたい)」、「コントロール(例:どんなことでも最善を尽くせば、最終的にうまくいく／努力すればどんなことでも自分の力で行ける)」、「コミットメント(例:楽しめる趣味をもっている／生きがいを感じているものがある)」の3下位尺度15項目に対して、「あてはまらない=1」から「あてはまる=5」の5件法で回答を求めた。

(5) 人生キャリア成熟尺度

坂柳²⁵⁾が20歳代—40歳代以上の対象者を用いて作成した成人キャリア成熟尺度の人生キャリア成熟尺度を用いた。これは「主に、人生や生き方への取り組み姿勢」を測定する尺度で、「人生キャリア関心性(例:人生設計は自分にとって重要な問題なので、真剣に考えている／どうすれば人生をよりよく生きられるのか、考えたことがある)」、「人生キャリア自律性(例:自分から進んで、どんな人生を送っていくのか決めていく／これからの人生を通して、さらに自分自身を伸ばし高めていきたい)」、「人生キャリア計画性(例:今後どんな人生を送っていききたいのか、自分なりの目標をもっている／自分が望む生き方をするために、具体的な計画を立てている)」の3下位尺度27項目に対して、「全くあてはまらない=1」から「よくあてはまる=5」の5件法で回答を求めた。

2.3 倫理的配慮

研究への参加は強制ではなく中止も可能であること、回答は統計的に処理され個人の特定はされないこと等の説明を提示した上で、同意した者のみが回答した。なお、本研究は東京家政大学大学院倫理委員会の承認を得た手続きで実施された(承認番号R2-13)。

3. 結果

3.1 対象者の基本属性

分析対象者1,000名の婚姻状況は、未婚61.7%、既婚(離別・死別含む)38.3%であった。また、子どもがいる者は25.7%、いない者は74.3%であった。社会人の内訳は、会社員・公務員・団体職員等(正規雇用)33.4%、同(非正規雇用)4.2%、自営業・フリーランス2.7%、パート・アルバイト15.3%、専業主婦14.4%であった。

3.2 大学生と社会人による各変数の違い

大学生と社会人によって、女性観を含む各変数に違いがあるかを検討するため、1要因分散分析を行った。なお、社会人であっても、20歳代と30歳代、40歳代とは、仕事や家庭における状況が異なると考え、3水準(大学生、社会人20歳代、30・40歳代)を設定した。なお、多重比較にはTukey法を用いた。その結果、効果量は小さいながらも($\eta^2=.006-.032$)複数の尺度で有意差が示された(Table 2)。

(1) 女性観

「献身的で愛情深い」と「見た目がよく清楚」以外で有意差が示された(社会の中でのチャレンジと成長 $p<.001$, それ以外 $p<.05$)。多重比較の結果、「細やかな思考力・判断力」では、20歳代の得点が最も高く、大学生および30・40歳代に比べて高かった($p<.05$)。また、「社会の中でのチャレンジと成長」では20歳代と大学生の得点が30・40歳代よりも高く(20代 $p<.05$, 大学生 $p<.001$)、「自立しておらず補佐的」の得点では20歳代が大学生に比べて高かった($p<.05$)。これに対して、「感情的でしたたか」については、30・40歳代の得点が大学生に比べて高いことが示された($p<.05$)。

(2) 一般性自己効力感

「行動の積極性」以外の下位尺度で有意差が示された(いずれも $p<.001$)。多重比較の結果、「失敗に対する不安」では大学生と20歳代が30・40歳代に比べて得点が高く(いずれも $p<.001$)、「能力の社会的位置づけ」では大学生の得点が20歳代、30・40歳代よりも高いことが示された(20代 $p<.001$, 30・40代 $p<.01$)。

(3) 本来感

1%水準で有意差が示され、多重比較を行ったところ、20歳代の得点が大学生、30・40歳代に比べて低かった(大学生 $p<.01$, 30・40代 $p<.05$)。

(4) ハーディネス

全ての下位尺度において有意差が示された(コントロール $p<.01$, それ以外 $p<.001$)。多重比較の結果、「チャレンジ」、「コントロール」、「コミットメント」のいずれにおいても、大学生の得点が20歳代、30・40歳代よりも高かった(チャレンジ20代 $p<.01$, 30・40代 $p<.001$; コントロールいずれも $p<.05$; コミットメントいずれも $p<.001$)。

(5) 人生キャリア成熟度

「人生キャリア自律性」にのみ5%水準で有意差が示され、多重比較を行ったところ、大学生が20歳代に比べて得点が高かった($p<.05$)。

3.3 女性が抱く女性観と一般性自己効力感、本来感、ハーディネス及び人生キャリア成熟度との関連

女性観を独立変数、それ以外の各尺度を従属変数とした重回帰分析を行った(Table 3)。その結果、全てにおいて有意な重相関係数が示された。そこで標準偏回帰係数をみると、標準偏回帰係数が.10未満と小さいものも含めると複数の尺度間に有意な関係性がみられた。

まず、女性観尺度の「細やかな思考力・判断力」は GSES の「能力の社会的位置づけ ($\beta=.15, p<.01$)」, 「見た目がよく清楚」はハーディネス尺度の「コントロール ($\beta=.11, p<.01$)」との間にのみ有意な正の値が示された。また、「感情的でしたたか」において有意な正の標準偏回帰係数がみられたのは、GSES の「失敗に対する不安 ($\beta=.09, p<.05$)」だけであった。

これに対して、「社会の中でのチャレンジと成長」では多くの尺度との間に有意な関係が示された。具体的には、GSES の「行動の積極性 ($\beta=.14, p<.01$)」, 本来感尺度 ($\beta=.23, p<.001$)、ハーディネス尺度の「チャレンジ ($\beta=.30, p<.001$)」, 「コントロール ($\beta=.30, p<.001$)」, 「コミットメント ($\beta=.23, p<.001$)」, 人生キャリア成熟尺度の「関心性 ($\beta=.19, p<.001$)」, 「自律性 ($\beta=.30, p<.001$)」, 「計画性 ($\beta=.21, p<.001$)」との間にそれぞれ正の標準偏回帰係数がみられた。同様に、「献身的で愛情深い」では、本来感尺度 ($\beta=.12, p<.05$)、ハーディネス尺度の「チャレンジ ($\beta=.13, p<.01$)」と「コントロール ($\beta=.16, p<.01$)」, 人生キャリア成熟尺度の「関心性 ($\beta=.15, p<.01$)」と「計画性 ($\beta=.13, p<.01$)」において有意な正の値が示された。

一方、女性観尺度の「自立しておらず補佐的」および「感情的でしたたか」については、各尺度と負の関係が示された。具体的には、「自立しておらず補佐的」ではハーディネス尺度の「チャレンジ ($\beta=-.10, p<.05$)」と「コミットメント ($\beta=-.09, p<.05$)」, 人生キャリア成熟尺度の「関心性 ($\beta=-.14, p<.001$)」と「自律性 ($\beta=-.19, p<.001$)」との間に有意な負の標準偏回帰係数が示された。また、「感情的でしたたか」では GSES の「行動の積極性 ($\beta=-.10, p<.01$)」と「能力の社会的位置づけ ($\beta=-.09, p<.05$)」, 本来感尺度 ($\beta=-.10, p<.05$)、ハーディネス尺度の「コントロール ($\beta=-.08, p<.05$)」と「コミットメント ($\beta=-.09, p<.05$)」, 人生キャリア成熟尺度の「計画性 ($\beta=-.16, p<.001$)」との間にそれぞれ有意な負の値がみられた。

4. 考察

4.1 社会的立場や年代による違い

分散分析の結果、女性観尺度の「自立しておらず補佐的」では、20 歳代の得点が大学生よりも有意に高かった。20 歳代は、仕事上わからないことも多く、先輩や上司に教えてもらいながら仕事を覚えていく時期である。また、業務内容も先輩や上司のサポート的なものが多いと予想される。これらは女性に限ったことではなく、男性も類似の状況であると考えられる。しかし、独立行政法人国立女性教育会館の調査²⁶⁾では、入社 5 年目の女性従業員で「やりがいのある仕事をしている」、「将来のキャリアにつながる仕事をしている」という設問に「あてはまる」と回答した者は 1 割弱と低く、「自分は期待されている」と感じている割合は男性よりも低いことが報告されている。すなわち、大学を卒業して社会人となり、職場で担う業務や先輩・上司の態度から、「女性は裏方として男性をサポートする存在」や「女性は一人で自立して仕事を行う存在ではない」といった女性観が強まる可能性が考えられる。

これに対して、「社会の中でのチャレンジと成長」の得点は、大学生と 20 歳代には違いがみられず、大学生および 20 歳代と 30・40 歳代との間に有意差が示された。30 歳代以降は、結婚・出産によって正規雇用を退職し、仕事と家庭の両立をしやすい非正規雇用で働く割合が増えていく時期である¹⁾。また、女性の管理職希望者は男性に比べ

て顕著に少なく、希望しない理由は「仕事と家庭の両立が困難になるから」が最も多かったという報告²⁶⁾もある。すなわち、「女性は社会の中で様々なことにチャレンジして成長できる存在だ」という感覚は、結婚・出産を現実的に考えたり、実際に経験する年代になって低下することが示唆される。

一方で、「自分らしくいられる」という本来感の得点は 30・40 歳代が 20 歳代よりも高かった。性役割葛藤を抱えやすい女性¹²⁾が職場でのやりがいを感じにくい²⁶⁾中で、仕事にこだわらず、自分のペースで仕事と家庭を両立することで「自分らしさ」を実感している可能性も考えられる。

次に、女性観以外の結果を見てみると、一般性自己効力感の「能力の社会的位置づけ」、ハーディネス尺度の「チャレンジ」、「コントロール」、「コミットメント」、人生キャリア成熟尺度の「自律性」等において、社会人の得点が大学生よりも低い傾向が認められた。このことから、女性は働く中で、自分の仕事内容や仕事と家庭の両立といった状況から、社会の中での自らの価値や貢献できる可能性を感じにくくなり、学生時代に有していた自信や向上心が低下してしまう可能性が示唆される。ただし、大学生と社会人では担う責任の重さや生活環境等が異なる点は男女に共通することである。したがって、本研究で得られた知見が女性に特徴的であるか、あるいは性別にかかわらない一般的傾向であるかを検討することは今後の課題である。また、今回の分析で得られた効果量はいずれも小さいものであったため、有意な差は確認されたものの、各変数に対して年代の違いがもたらす影響はそこまで大きなものではない可能性に留意する必要がある。

4.2 女性が抱く女性観と諸要因との関連

重回帰分析の結果から、女性観の中でも「社会の中でのチャレンジと成長」が複数の要因に関連することが示された。具体的には、「女性は社会の中で積極的に活動し、チャレンジする中で成長できる存在」というイメージを抱いている女性ほど、自分の努力で物事を達成できると感じ、自信をもって積極的に様々な活動を行い、自分らしく生きがいをもって生活しているといえる。また、より良い生き方や人生の目標・成長について考える傾向がみられた。同様に、女性観の「献身的で愛情深い」においても、複数の下位尺度との間に有意な正の関係が示された。具体的には、本来感、ハーディネス（チャレンジ、コントロール）、人生キャリア成熟度（関心性、計画性）であり、女性は献身的に他者をサポートする存在だととらえている女性ほど、自分の力を信じてチャレンジし、自分らしく、自分の人生について考える傾向にあるといえる。

従来の多くの研究では、男性性役割と女性性役割の両方を自己概念としてもつ「両性具有型 (androgyny)」が適応的で精神的健康が高いと報告されている¹⁶⁾。「社会の中でのチャレンジと成長」は男性の性役割、「献身的で愛情深い」は女性の性役割ととらえることができ、本研究においても、女性にとって両方の性役割がそれぞれ適応を促進する可能性が示唆された。

これに対して、女性観の「感情的でしたたか」や「自立しておらず補佐的」では、複数の下位尺度との間に有意な負の関係性が認められ、「女性は感情的でしたたかだ」、「女性は自立しておらず、他者を補佐するだけの存在だ」といったイメージを抱いている女性ほど、自分に自信がもてず、人生に対する考えや向上心が弱いといえよう。

「感情的でしたたか」の項目をみてみると、「女性は、相手によって態度をかえる」、「女性は、感情的だ」などネガ

ティブなイメージと解釈でき、ネガティブな女性イメージをもつ女性は否定的な傾向をもつと示唆される。また、「自立しておらず補佐的」については、「他者を頼って助けてもらう」、「意思決定を他人に任せる」、「女性のできることは限られている」などの項目から構成されており、他者依存や能力・可能性の限界がイメージされる。これは「か弱く、男性に守ってもらう存在」という旧来型の女性イメージと考えられるが、本研究の結果から、このような女性イメージを持っている女性は、積極性や生きがい感、自分の人生に対する意識が低い可能性が考えられる。

ただし、「献身的で愛情深い」、「感情的でしたたか」、「自立しておらず補佐的」で示された標準偏回帰係数の値はいずれも小さく、本研究のサンプル数が多いことを考慮すると限定的な結果として解釈する必要がある。

4.3 今後の課題

最後に、本研究の限界と今後の課題を述べる。第1は、本研究の対象者が女性のみであった点である。三浦・平野・近藤・五十嵐・井上・岡島²⁷⁾は、大学生と社会人の男女を対象とした調査を行い、抱いている女性観や社会人になってからの女性観の変化が男女で異なる特徴を示すと報告している。今後は、男性データも収集して男女の特徴を比較することが必要である。

第2に、年代や基本属性を考慮したより詳細な検討があげられる。本研究では、既婚/未婚、子どもの有無、雇用形態などの要因には注目せず、大学生、20歳代社会人、30・40歳代社会人のグループ間比較を行なった。しかし近年、

女性の家族形態や働き方は多様化している。同年代の女性社会人であっても、未婚者/既婚、子どもの有無やシングルマザー等によって生活パターンは異なり、正規雇用とパートタイマーはもちろん、正規雇用であっても管理職者と非管理職者では本研究で取り上げた諸要因の特徴が異なる可能性が考えられる。したがって、今後はこれらの基本属性を考慮した分析を行うことが課題である。

第3は、社会に出てからも「女性は社会の中で積極的にチャレンジし、成長できる」というイメージを低減させないための働きかけについてである。重回帰分析の結果から「社会の中でのチャレンジと成長」といった女性観を強めることの重要性が示唆されたが、分散分析結果からは、女性は大学を卒業して社会に出ることで、このような女性イメージが低減してしまう可能性が示唆された。社会の構造的な問題解決と同時に、無意識に抱いている女性観、あるいはそのイメージに縛られている自分に気づくような、個人を対象とした心理的アプローチも必要ではないだろうか。今後は、このような心理教育的プログラムの開発・実施が期待される。

4.3 まとめ

本研究では、青年期・成人前期の女性が抱く女性観が一般性自己効力感、本来感、ハーディネス、および人生キャリア成熟度に及ぼす影響を検討した。

その結果、一般性自己効力感の「能力の社会的位置づけ」やハーディネスについては、社会人が大学生よりも低い特徴がみられた。自己の能力や努力を信じることで、多様な経

Table 2 女性観、一般性自己効力感、本来感、ハーディネス、人生キャリア成熟度における大学生・社会人による違い

	大学生 (n=300)		20代社会人 (n=300)		30・40代社会人 (n=400)		F値	η^2	
	M	(SD)	M	(SD)	M	(SD)			
女性観尺度									
細やかな思考力・判断力	10.83	(2.56)	11.31	(2.68)	10.83	(2.28)	4.01 *	.008	大学生, 30・40代<20代 *
社会の中でのチャレンジと成長	12.18	(2.77)	11.74	(2.71)	11.16	(2.66)	12.55 ***	.025	30・40代<大学生 ***, 20代 *
献身的で愛情深い	10.30	(2.66)	10.55	(2.70)	10.23	(2.37)	1.38 n.s.	.003	
自立しておらず補佐的	8.60	(2.70)	9.16	(2.73)	8.99	(2.49)	3.66 *	.007	大学生<20代 *
感情的でしたたか	11.45	(2.87)	11.81	(2.86)	11.97	(2.59)	3.08 *	.006	大学生<30・40代 *
見た目がよく清楚	12.13	(2.61)	11.95	(2.58)	11.78	(2.23)	1.69 n.s.	.003	
一般性自己効力感尺度									
行動の積極性	2.66	(2.09)	2.43	(2.09)	2.70	(2.01)	1.68 n.s.	.003	
失敗に対する不安	3.28	(1.62)	3.05	(1.62)	2.60	(1.62)	16.22 ***	.032	30・40代<大学生, 20代 ***
能力の社会的位置づけ	1.85	(1.45)	1.41	(1.35)	1.45	(1.40)	9.32 ***	.018	20代 ***, 30代40代 **<大学生
本来感尺度									
	21.24	(5.89)	19.67	(5.80)	20.81	(5.64)	6.03 **	.012	20代<大学生 **, 30・40代 *
ハーディネス尺度									
チャレンジ	17.54	(4.54)	16.31	(4.54)	15.97	(4.20)	11.42 ***	.022	20代 **, 30・40代 ***<大学生
コントロール	15.93	(4.20)	14.99	(4.21)	15.05	(3.86)	5.29 **	.010	20代, 30・40代<大学生 *
コミットメント	16.96	(4.03)	15.50	(3.97)	15.73	(3.82)	12.28 ***	.024	20代, 30・40代<大学生 ***
人生キャリア成熟度尺度									
関心性	29.33	(5.53)	28.47	(5.53)	28.66	(5.66)	2.03 n.s.	.004	
自律性	30.16	(4.88)	29.08	(4.39)	29.43	(4.38)	4.49 *	.009	20代<大学生 *
計画性	26.86	(6.00)	26.30	(5.91)	26.04	(5.54)	1.78 n.s.	.004	

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

Table 3 女性観尺度から一般性自己効力感, 本来感, ハーディネスおよび人生キャリア成熟度への重回帰分析結果

	一般性自己効力感						ハーディネス尺度						人生キャリア成熟度尺度						
	行動の積極性		失敗に対する不安		能力の社会的位置づけ		本来感尺度		チャレンジ		コントロール		コミットメント		関心性		自律性		計画性
R(R ²)	.24 (.06) ***	.16 (.02) ***	.22 (.04) ***	.32 (.10) ***	.38 (.14) ***	.60 (.35) ***	.30 (.09) ***	.35 (.11) ***	.42 (.17) ***	.33 (.10) ***									
細やかな思考力・判断力	.06 (n.s.)	-.06 (n.s.)	.15 (**)	-.02 (n.s.)	-.02 (n.s.)	-.03 (n.s.)	-.02 (n.s.)	.05 (n.s.)	.00 (n.s.)	.04 (n.s.)									
社会の中でのチャレンジと成長	.14 (***)	-.04 (n.s.)	.06 (n.s.)	.23 (***)	.30 (***)	.30 (***)	.23 (***)	.19 (***)	.30 (***)	.21 (***)									
献身的で愛情深い	.04 (n.s.)	-.07 (n.s.)	-.04 (n.s.)	.12 (*)	.13 (**)	.16 (**)	.08 (n.s.)	.15 (**)	.08 (n.s.)	.13 (**)									
自立しておらず補佐的	-.07 (n.s.)	.04 (n.s.)	-.06 (n.s.)	-.02 (n.s.)	-.10 (*)	.01 (n.s.)	-.09 (*)	-.14 (***)	-.19 (***)	-.01 (n.s.)									
感情的でしたたか	-.10 (**)	.09 (*)	-.09 (*)	-.10 (*)	.03 (n.s.)	-.08 (*)	-.09 (*)	-.05 (n.s.)	.03 (n.s.)	-.16 (***)									
見た目がよく清楚	.03 (n.s.)	.00 (n.s.)	.07 (n.s.)	.07 (n.s.)	.03 (n.s.)	.11 (**)	.04 (n.s.)	.03 (n.s.)	.08 (n.s.)	-.02 (n.s.)									

カッコ内は単相関

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

験への動機づけや生きがいを感じて物事に取り組むことは、社会人になると減少してしまう可能性が示唆される。また、女性は社会の中で様々な事柄にチャレンジして成長できる存在だという感覚や失敗を恐れない気持ちは、社会的立場(大学生/社会人)というよりは、年代によって異なる可能性が示された。具体的には、大学生と20歳代社会人の得点が高く、結婚・育児等の家庭状況の変化や職場における責任の増加に伴い、30・40歳代になるとこれらの感覚が低下してしまう可能性が考えられる。

一方、女性観と各変数の関連性では、「社会の中でのチャレンジと成長」が様々な変数に影響することが示された。特に、多様な経験をしたい、最善を尽くせばうまくいく、人生は自分自身で決めて進み成長したい、といった考えを促進することが示唆された。女性が女性に対するポジティブなイメージを抱くことは、女性である自分自身に対して肯定的にとらえることにつながる。したがって、今後は、このような女性観を高めるかかわりや、社会に出てからも失われぬような心理教育的アプローチの開発が期待される。

謝辞

調査にご協力いただいた皆様に心より御礼申し上げます。また、本論文の執筆にあたり、心理カウンセリング学科の井上俊哉先生、五十嵐友里先生、岡島義先生に貴重なご助言をいただきました。ここに感謝の意を表します。どうもありがとうございました。

引用文献

1) 総務省 (2019). 平成30年労働力調査(基本集計).
 2) 三菱UFJリサーチ&コンサルティング(2009). 平成20年度厚生労働省委託調査 両立支援に係る諸問題に関する総合的調査研究(子育て期の男女へのアンケート調査及び短時間勤務制度等に関する企業インタビュー調査)報告書.
 3) 株式会社リベルタス・コンサルティング(2020). 令和元年度内閣府委託調査 令和元年度家事等と仕事のバランスに関する調査報告書.

4) 高井 範子・岡野 孝治(2009). ジェンダー意識に関する検討——男性性・女性性を中心にして—— 太成学院大学紀要, 11, 61-73.
 5) 伊藤 裕子(1978). 性役割の評価に関する研究 教育心理学研究, 26, 1-11.
 6) 伊藤 裕子(2000). 成人の性差観が性役割選択に及ぼす影響 心理学研究, 71, 57-63.
 7) 目黒 依子(2000). 女性の高学歴化とジェンダー革命の可能性 目黒 依子・矢澤 澄子(編) 少子化時代のジェンダーと母親意識 新曜社 9-28.
 8) Haworth, C. M., Dale, P. S., & Plomin, R. (2009). Sex differences and science: The etiology of science excellence. Journal of Child Psychology and Psychiatry, 50, 1113-1120.
 9) Knopik, V. S., & DeFries, J. C. (1998). A twin study of gender-influenced individual differences in general cognitive ability. Intelligence, 26, 81-89.
 10) 伊藤 裕子(1998). 高校生のジェンダーをめぐる意識 教育心理学研究, 46, 247-254.
 11) 森永 康子・坂田 桐子・古川 善也・福留 広大(2017). 女子中高生の数学に対する意欲とステレオタイプ 教育心理学研究, 65, 375-387.
 12) 伊藤 裕子・秋津 慶子(1983). 青年期における性役割観および性役割期待の認知 教育心理学研究, 31, 146-151.
 13) 松本 芳之(2002). 役割期待が自己呈示行動に及ぼす影響: 性役割期待と成功回避 早稲田大学大学院文学研究科紀要: 第1分冊 哲学東洋哲学心理学社会学教育学, 48, 39-52.
 14) 吉岡 真梨子(2018). 性役割期待が大学生の自己呈示に及ぼす影響——ジェンダー・パーソナリティ特性に着目して—— 広島大学大学院教育学研究科紀要第一部, 67, 57-64.
 15) 上山 直美・岸川 亜矢・杉山 智春(2009). 性役割分業意識と家事分担およびソーシャル・サポートの利用性とストレスとの関連——X 島に居住する育児期の母親の実態調査—— 関西看護医療大学紀要, 1, 15-24.
 16) 芳田 茂樹(1990). 青年期における性役割形成と生活感情との関連について 大手前女子短期大学・大手前栄養文化学院・大手前ビジネス学院研究集録, 10, 1-19.
 17) Betz, N. E., & Hackett, G. (1981). The relationships of career-related self-efficacy expectations to perceived career options in collage women and men. Journal of Counseling Psychology, 28, 399-410.

- 18) Matsui, T., Ikeda, H., & Okunishi, R. (1989). Relations of sex-typed socialization to career self-efficacy expectations of collage students. *Journal of Vocational Behavior*, 35, 241-250.
- 19) 小泉 大輔・朴 弘文・平野 光俊 (2013). 女性活躍推進施策が若年女性のキャリア自己効力感に与える影響 *経営行動科学*, 26, 17-29.
- 20) 平野 真理・三浦 正江・近藤 有美香 (2020). 現代の若者が持つ社会における暗黙の女性観の探索的検討—文章完成法を用いた質的分析— *東京家政大学研究紀要1 人文社会科学*, 60, 57-63.
- 21) 近藤 有美香・平野 真理・三浦 正江・岡島 義 (2021). 女性観尺度短縮版の作成 *日本心理学会第85回大会発表論文集*, 26.
- 22) 坂野 雄二・東條 光彦 (1986). 一般性セルフ・エフィカシー尺度作成の試み *行動療法研究*, 12, 73-82.
- 23) 伊藤 正哉・小玉 正博 (2005). 自分らしくある感覚 (本来感) と自尊感情が well-being に及ぼす影響の検討 *教育心理学研究*, 53, 74-85.
- 24) 多田 志麻子・濱野 恵一 (2001). ハーディネスとストレス反応および人格特性との関連 *日本教育心理学会第43回大会発表論文集*, 135.
- 25) 坂柳 恒夫 (1999). 成人キャリア成熟尺度 (ACMS) の信頼性と妥当性の検討 *愛知教育大学研究報告*, 48, 115-122.
- 26) 独立行政法人国立女性教育会館 (2020). 令和元年度男女の初期キャリア形成と活躍推進に関する調査 (第五回調査) 報告書.
- 27) 三浦 正江・平野 真理・近藤 有美香・五十嵐 友里・井上 俊哉・岡島 義 (2020). 青年期女子における精神的健康の向上を目的とした予防的プログラムの開発と効果の検討 *東京家政大学総合研究プロジェクト研究報告書 2020年度—No.3*, 7-8.